



山陽道から高取峠を経て赤穂へ
四十八番目の義士を乗せて早駕籠が駆け抜ける

高取峠

播州の小都市・赤穂は、塩と忠臣蔵で有名な城下町。千種川の河口に位置し、播磨灘を望むこの町は山陽道（現在の国道2号線）の南に位置するため、町の東側にある高取峠（注※1）から入るのが関西方面からの一般的なルートでした。

NHKの大河ドラマ「元禄繚乱」の中でも、浅野内匠頭のお国入りや参勤交代で江戸へ向かう主君の旅立ちを大石内蔵助が見送るシーンの舞台となった峠といえばご記憶の方もあられるでしょう。

峠からは今も昔も、眼下に赤穂の城下町が一望できます。歴史の流れに翻弄されながらも力強く生きた赤穂の人々に想いを馳せながらこの町を訪ねてみると、そこには意外な発見がありました。

（注※1）たかとうげ。江戸時代の表記では高取峠。現在のJR赤穂線の高取トンネル上で確認できる往時の道の跡は現在の峠より勾配が急である。赤穂へ入るルートとしての重要性が失われたのど前後して地名の表記も簡略化されたと推定される。

高取峠より赤穂市街を望む



高取峠記念モニュメント

松之廊下の急報を4昼夜半で赤穂に届ける

元禄14年（1701）3月19日。夜明け前の静寂を破って2挺の早駕籠が掛け声とともにこの鷹取峠に差しかかりました。乗っているのは赤穂藩馬廻役（うまわりやく）・早水藤左衛門と中小姓・萱野三平。頭に鉢巻、胴には晒しをきつく巻き、振り落とされぬよう駕籠に吊り下げられた白布に取りすがって座っていました。

二人は、14日江戸城松之廊下で起きた赤穂城主浅野内匠頭長矩（あさのたくみのかみながのり）の殿中刃傷を知らせる急使として、不眠不休で江戸から早駕籠を飛ばしている最中でした。峠を下れば、赤穂の城下。疲労で朦朧（もうろう）としながらも、ようやくここまでたどり着いたと安堵したに違いありません。

江戸から赤穂まで距離にして約155里（約620km）。通常なら徒歩で15～16日かかるところ、早駕籠を乗り継いでわずか4日半。その間、食事は握り飯、廁（かわや）に行くのも宿駅に着いて駕籠のかき手が交代する際という苦行にも等しい4日間でした。

萱野三平に至っては、箕面（大阪府箕面市）の生家前を通る際、



母の葬儀の列に会いながらも駕籠を降りることもなくひたすら赤穂に向かって来たと伝えられます。三平自身はその後、討ち入りに反対する親兄弟と同志たちとの板挟みに悩み自害、討入りに参加してはいませんが、第一報をもたらしたこの時の功をもって「四十八番目の義士」と呼ぶ人もあるようです。

現在の高取峠は、国道250号線の相生市との境近くにあり、その位置は江戸時代の鷹取峠に比べると南東にあたります。峠付近には平成2年（1990）、兵庫県上郡土木事務所が緑のランドマーク事業として設置した早駕籠の記念モニュメントがあり、碑には「忠臣蔵で名高い、元禄赤穂事件の赤穂での始まりはここからスタートしたと言ってもよいでしょう」と刻まれていました。



赤穂城跡

弥生時代から続く赤穂の製塩の歴史

赤穂はまた、製塩の盛んなことでも有名です。その理由としては、瀬戸内海地方の雨が少なく温暖な気候や、天然の広い干潟が多く満潮時と干潮時の海面の高低差が大きいなどの自然条件に恵まれたことがあげられ、古くは弥生時代にまで遡るといわれます。

江戸時代に入ると干拓技術や堤防を築く技術が進歩して、大規模な塩田が開発されました。この入浜塩田による赤穂の塩づくりは「赤穂流」と呼ばれ、瀬戸内海はもちろん、遠く東北や鹿児島にまで伝えられました。



赤穂臨海公園塩田跡



赤穂藩は石高5万石に過ぎない小藩でしたが、この製塩による収入もあって、財政豊かとはいえないまでも他藩ほどひっ迫していなかったようです。「忠臣蔵」の発端となった吉良上野介と浅野内匠頭の評いにも塩の製法をめぐる対立があったとする説（注※2）もあり、塩の産地・赤穂ならではの推測といえるでしょう。

（注※2）吉良出身の作家尾崎士郎の小説「吉良の塩」による。その内容は、元禄当時、吉良藩の塩田面積は赤穂藩の約6分の1に過ぎず、質も粗悪であったため、上野介は良質塩の製法を伝授してくれるよう長矩に申し入れるものの断られ、スパイを送る。結果、1人を除き斬首となるが、吉良藩の質庭塩はこのスパイが伝えた製法のおかげで質を上げ、赤穂塩の市場を荒らし始める。長矩は上野介のあこぎなやり方に憤激し、恨みを抱くことになったというもの。しかし、実際には赤穂藩の製塩法はオープンであったため史実ではないと思われる。

知られざる江戸期の土木技術世界初の近代上水道を完成

赤穂は千種川下流のデルタに人為的に形成された城下町。城下の加里屋周辺では掘井戸に海水が湧出するうえ雨量も少ないとあって、生活用水の確保は早くから課題とされていました。その結果、関ヶ原の戦いから14年後、赤穂には上水道が整備されます（注※3）。

具体的には、慶長19年（1614）から元和2年（1616）の3年をかけ、山（俗称切山）を掘削して約100mの隧道（切山隧道）を作り、城内まで熊見川（現在の千種川）の水を引くことに成功しました。小田原の早川上水、江戸の神田上水など、それ以前にも上水と呼ばれるものは設けられていましたが、いずれも水源から水を引いただけのもので、赤穂のように当初から導水に加え、各戸給水までが行われてい



汲み出し枀（町屋）

た施設は他に例をみません。海外に目を転じてみても、ヨーロッパで最初に近代上水道を整備したのはロンドンの1619年というのが定説ですが、赤穂ではそれより3年も早く上水道が引かれていたこととなります（注※4）。



駅前通りには、その歴史的意義を記念し、その保存と活用のシンボルとして昭和57年（1982）に設置された「赤穂藩上水道モニュメント」があります。

（注※3）『播州赤穂郡志』に「水道八池田家ヨリ始マル、垂水半左衛門根木ノ山ヲ切抜キ周世（すせ）川ノ水ヲ導テ飯屋（加里屋）ニ通ス」とある。

（注※4）出典は立石 優 著 PHP文庫「忠臣蔵99の謎」より

生活を支え続けた江戸時代のハイテク技術

取水口の切山で隧道掘削という現代でもやっかいな難工事があえて行われたのは、当時の熊見川（千種川）の流路が切山の北側付近に突き当たっており、この地点は淵となって水量も安定し、水位もかな

り高かったためと推定されます。今のような便利な道具も機械もなかった江戸時代に人力だけでよくぞこれほどの難工事が行われたものです。明治や昭和期に拡幅や壁面被覆などの追加工事が行われたものの、隧道の内部は往時の姿をとどめており、先人が苦勞して掘削した岩肌の様子を今も目の当たりにすることができます。



当時の水道枀と枀（展示 赤穂市立歴史博物館）

さらに驚くべきは、取水、導水、浄水（注※5）、給水と、現代の水道と全く同じ機能を当時から備えており、昭和17年（1942）に近代上水道が整備されるまで上水道として使用され続けたという点です。江戸時代最初の領主、池田輝政の家臣には優れた土木技術者が多かったと伝えられています

（注※5）導水路と配水路の接点には大枀（おおます）が、枀に入る前の導水路に竹筒のゴミ除けが設けられ、大枀に接して濾し場があり、配水槽に入る前の水を砂礫と木炭で浄化していたと伝えられる。一般に、世界で最初の上水用濾過装置といわれる極速濾過装置がイギリスで作られたのは1829年。赤穂での詳細な設置年代は不明だが、文政期（1818～30）以前であるのは間違いないため、世界最古の濾過施設と書いていいだろう。

資料提供：赤穂市教育委員会事務局 生涯学習課

主幹 宮崎素一 氏